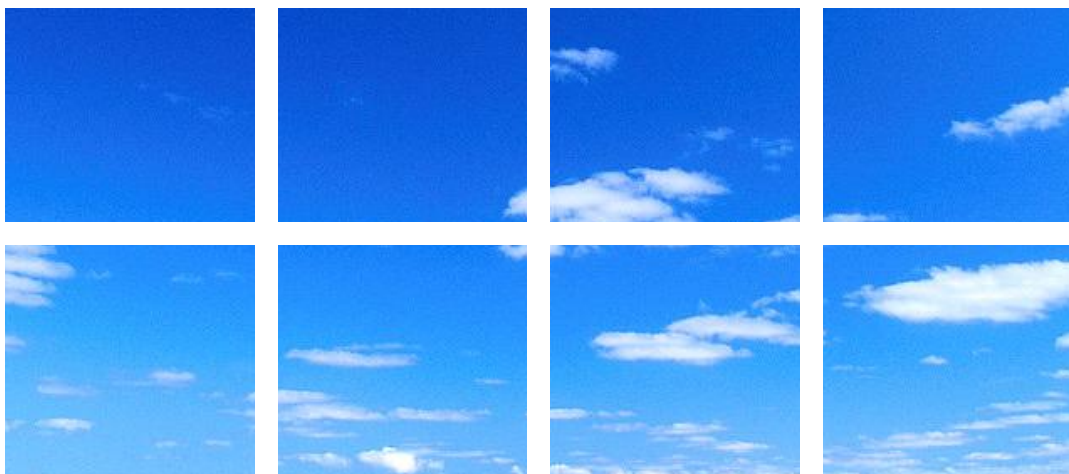


メルトリックス・ルソリア
Meretrix lusoria



オルガカサンプンチ



史記の天官書には、**「海旁蜃気は楼台に象る」**と云々。
蜃とは大蛤なり。海上に気をふきて、樓閣城市のかたちをなす。
これを蜃気楼と名づく。又海市とも云。

—今昔百鬼拾遺 雲—

1

緩む寒さと共に山頂を覆っていた根雪もすっかり消え、草木萌え動ずる雨水の末。

いまや季節は眠気を誘う穏やかな春の中。大結界の要たる博麗神社の境内から幻想郷を一望する枝の上で、小さな百鬼夜行、伊吹萃香は杯を呷る。

「んー。春だねえ」

自前の瓢箪は腰に下げ、代わりに手にした杯には澄んだ白酒しろきと桃の花の切片。そこに開いたばかりの桃の花を刻んで散らした酒は桃花酒とも呼ばれ、春の甘い香味を愉しむものだ。

元来、邪気を払うための霊酒であるが、古今稀に見る酒豪の鬼にあつては些細なことであるらしい。

杯の中に揺れる白い花に、ふと萃香は呟いた。

「……あいつも元気でやつてるのかな」

追憶の中、いまはここにはいない相手に向けて杯を掲げると、萃香はそれをくいと呷った。一息に呑み干した杯の底には小さな桃の花欠が一枚。

喉を滑り落ちる酒精に、萃香は満足げに眼を細めて、ほんの

りと紅らんだ頬を緩める。

高い空をさえざる鳥の声、ちらほらと緑萌える木々に春の穏やかさを感じ、萃香はごろんと背中を枝に乗せた。心地よい酔いに任せ、うつらうつらと船を漕ぎ始める。

……しばし、そうして微睡まじろんでいただろうか。

「……ん？」

転寝の中にわずかな違和感を覚え、萃香は片目を開けた。

小鳥たちの囀りがびたりと途切れ、遠く幽かな地響きがざわりと枝を揺らす。

薄れはじめた春の気配の中、どこからともなく、小さな波の音が迫っていた。

2

「よー、邪魔するぜ」

春の陽気を受け薔を開く桃の香の中、人里は稗田邸の門を叩く声がある。……否、来訪者がやつてきたのは阿礼乙女、稗田阿求の書斎に面した邸内の中庭だ。

「阿求、いるかー？」

「騒がなくても聞こえますよ」

障子を引き開け阿求がやれやれと出迎えた先、桃の枝上から縁側に顔を出したのは魔法の森の白黒魔法使いだ。ぴよんと愛用の箒から飛び降りた霧雨魔理沙は首元のマフラーを外し、暑そうにばたばたと帽子で顔を仰ぐ。

「いやあ、朝は寒かったから厚着してきたんだが、今日はやたらに暖かいな」

「せめて玄関から訪ねてきて頂きたいのですが」

「今更知らん仲じやあるまい？ 省ける手間は省くべきだぜ」

「親しき仲にも礼儀ありという言葉もありますけれど？」

「まあまあ、急用なんだから大目に見てくれ。ちつと聞きたいことが……ってなんだ、ブン屋もいたのか」

言いかけた魔理沙は、部屋の中に先客の姿を見つける。

お茶を啜りながら完璧な営業スマイルを浮かべるのは、里に最も近い天狗、射命丸文。その名の通り、部屋の中ですかかりくつろいだ様子だった。

「ふむ。さすが魔理沙さん。いつもこうしてあちこちの乙女を訪ね歩いては誑かしているという訳ですね？」

「言ってる」

文の揶揄を受け流し、魔理沙はしかし、と呟いて、

「なら尚更都合が良かったな」

あがるぜ、と声をかけ、魔理沙は靴をばいばいと脱ぎ捨てて、座敷に踏み入れた。

脱いだ帽子をくるんと回し、縁側に立てかけた箒の上にひっかける。

「訊きたいってのは他でもない、例の長太の^{ながふ}大蛤^{はまぐり}の話なんだがな」

魔理沙はスカートのポケットの中から、すこし色の褪せた新聞を取り出した。三つ折りの紙面は、他でもない文の手によるものだ。

「……ああ。先日の記事ですか？」

——『**里の上空に虹色の空中都市現る！**』

大仰な煽りの題字と、あまり中身の無い文章、そして一面でかかど飾る虹色の楼閣の写真が紙面を所狭しと踊る。例に漏れず、天狗らしき満載の内容だった。

文々。新聞の号外には、天上に突如出現した楼閣と、崖崩れで露になった古い時代の地層から、貝の化石と一緒に大蛤が姿を見せたという事が記されている。

^{はまぐり}「蜃^{しん}能く気を吐いて楼台^{ろうだい}を成す、ですね」

記事を覗きこみ、阿求は頷く。

この時現れた楼閣というのは光の屈折によって生まれる上位蜃気楼であり、それを産み出したのは幻を吐く大蛤の妖怪、蜃であつた。

この妖貝の吐き出した幻影の楼閣を、異変と勘違いして巫女が探し回るといひと騒動があつたのだが——

「その蜃気楼の素つてのを話の種に見に行つてみようと思つたんだが、どこに行つても見当たらないときた」

「おや」

ぴくんと文が片眉を跳ねさせる。

「おかげであつちこつち飛び回る羽目になつてな。途中でお前んとこの白狼天狗やらに追つ掛けられて、まあ鬱陶しいつたらなかつたぜ」

「おかしいですね。あれは記事の通り、かふらさわ 錆沢の崖崩れの下で息を吐いていたはずですが」

無いもんは無いんだぜ、と魔理沙は肩をすくめる。

「それで、阿求なら何か知らないかつて思つたんだ。誰かが持つて行つたにしたつて、あの馬鹿でかい図体じゃ難儀だろ？」

「……ふむ」

二人の話を聞いていた阿求は腕組みをして、傍らの書架から一冊の本を机上に広げる。

「こちらをご覧いただけますか？」

「なにに？ 『海旁蜃氣』……？」

びつしりと並ぶ漢文に魔理沙が眉をしかめる隣で、阿求はこほんと咳払いをひとつ。

『海旁の蜃氣は楼台を象り、広野の氣は宮殿を成す』。『史記』天官書第五の一節です。

蜃の吐く氣が象る幻を蜃気楼と呼ぶのは確かですが、光の屈

折による幻影そのものは別に海だけで見られる現象ではありません。ここにもある通り、山で見られる蜃気楼は広野の氣より生じるとされ、海で見られる蜃気楼とは違うものとされているのですよ」

然るに、と阿求は紙面を指差す。

「まずはこのとき里の上空に現れた蜃気楼が、間違いなく崖から発掘された大蛤の吐いた氣によるものであるのかという所から考えるべきかと思いますが」

「おや。それは心外ですね。私の取材に誤りがあると？」

「ただの長生きの貝だった可能性もあると思いますよ？」

疑つても仕方ないですが、と阿求は苦笑しつつ、

「蛤というくらいですから、蜃は海の生き物ですからね。今回は、たまたま古い地層から生きたままの姿で発掘されたわけですが——」

「長太の大蛤は、海のない幻想郷じゃ、長くは生きられないというわけですね」

いつの間にか、文も取材用の手帖を捲りながら参加している。

「つてことはなんだ。どつかで干からびてるのか？」

「曲がりなりにも年経た妖貝ですから、はつきりとは言えませんが——この記事が書かれてからもうだいぶ経ちますしね。生存は望み薄ではないでしょうか」

「水ならそこらにも沢山あるぜ？ 蛤つてのは湖じゃ生きられ

ないのか？」

「それは愚問ですなえ魔理沙さん。人間に真水の代わりに塩水
を飲んで生きていられますか、と聞くようなものですよ」

「貝の中には淡水生のものもありますけれど、蛤はそうではな
いようすしね」

阿求が補足する。

「なんだ。結局草臥れ儲けか……。」

つまらんなー、と頬を膨らませ、魔理沙は机の上にぺたりと
突っ伏す。

「せめて一目見たかったぜ」

「いやいや。山への不法侵入を咎めないだけで有難いと思つて頂
きたいのですが」

「どうせ、命令なんざ真面目に守る気もないんだろうに」

横目で見やる魔理沙に、文は答えずにこりと微笑むのみ。

「うーむ。……ところで喉が渴いたぜ。熱いお茶が一杯怖いな」

「まったく、大したものですね」

魔法使いの図々しさに呆れつつも、阿求は使用人を呼ぶため
に卓上の鈴を鳴らす。しかし、邸内にりと響いた鈴の音にも、

一向に返事がない。

「……？ ちょっと失礼します」

首を傾げ、阿求は席を立った。

何をしているのかと眉を潜め、廊下へと出て見れば、使用人

達は庭のあたりに一所に固まってなにやら囁き交わしていると
ようだった。ひそひそ話に夢中な彼女達の元に近付き、阿求は
こほんと咳払いをする。

「もしもし？ ヤエさん。お客様にお茶を——」

「し、失礼しましたっ、ただいま」

名を呼ばれた若い女中が、飛び上がって駆けてゆく。阿求は

残る使用人達を捕まえ、理由を問いただそうと顔を見まわした。

「どうしました？ こんな所に集まって」

「いえ。その……」

使用人たちはお互いに顔を窺い、どうにも齒切れ悪く口籠る
ばかり。彼女達がちらちらと庭の外へ視線を送っているのに気
付き、阿求は首を傾げながら草履を吐いて庭に下りる。

「ん？ どうした？」

騒ぎを聞き付けたのか、魔理沙が書斎から顔を出した。文も
それに続いて姿を見せる。

「そのう、あれを……」

使用人の指差した先。桃の枝とは反対側の空に視線を向け、
阿求はしばし言葉を失った。

里から見てちょうど東の方角、春の青空を切り取るように、
不可解なモノが現れていたのだ。

「……なんだありや」

「霊夢さんのところですね」

幻想郷の東端にある山々を覆うように、景色に歪みが生じ、ぼんやりと霧のような塊が浮かんでいる。形状はほぼ球状に近く、おおよそ東の空の四分の一ほどが切り取られている。ぽけた霧の輪郭は山の一部を飲み込み、恐らく博麗神社もその中に取り込んでいるように思われた。

「……ふむ」

阿求が興味深げにそれを見ている間に、文はひとつ頷いて背中の黒翼を広げ、高下駄の歯で地面を蹴った。

ひようと鋭い風の一閃を残し、天狗の姿はかき消える。

「あ！ おい待て！」

叫ぶ魔理沙だが、その頃には文の姿はすでになく、わずかなそよ風が庭木を揺らすのみだ。

「しまった、出遅れたぜ」

悔しげに呻いた魔理沙は、慌てて縁側に立ってかけていた箒を掴むとその上に跨った。帽子をくるんと頭に寄せ、稗田邸の中庭を舞い上がる。

——と、そこへ。

「ああ、ちよつとお待ちください魔理沙さん」

「うお!？」

袖を掴まれ、がくんとバランスを崩した魔理沙のそばへ、阿求がにこにこ微笑みながら近付く。

「つかぬ事をお聞きますが、異変を前に助言役はご入り用で

はありませんか？」

「……なんだって？」

「地底の悪霊騒動の時と同じように考えて頂ければ結構ですよ。ええ、幻想郷の全てを見聞きて溜めた稗田の歴史、決して損はさせませんよ。」

しっかりと魔理沙の袖を掴んだまま、阿求は胸を張って、おせる。わくわくと目を輝かせる御阿礼の子からのアプローチに、魔理沙は困惑しつつも聞いてみた。

「本音は？」

「折角の異変、直にこの目にできる機会はそうありませんので」「……成る程な」

阿礼乙女の押しの強さに、魔理沙は溜息をついて座る位置をずらし、箒の後部にもう一人分のスペースをつくる。

阿求はいそいそと壁に掛けていた外套を羽織り、手近な座布団を一枚、二つ折りにして箒に乗せると、その上にちよこんと横座りする。

「あ、あの、阿求様!？ どちらへ!？」

「あお夕飯までには戻りますので」

心配して駆け寄ろうとする使用人を制して、阿求はすつと魔理沙の腰に腕を回した。

「では、参りましょうか。……落っこたさないようにしてくださいね?」

「やれやれだぜ」

なんとも疲れたように呟いて。帽子を心持ち深めに降ろし、魔理沙は箒を宙へと踊らせた。

[3]

「——うーむ」

人里から幻想郷を東に縦断し、普通に飛ばば一刻程もかかる距離を、わずか四半刻も経たないうちにかつ飛んで、魔理沙は阿求と共に博麗神社の上空へやってきた。

しかしこうして近付いてはみたものの、山の周囲を取り巻く付近の空間の状況は依然として判然としない。ぼやけた霧のような空間は。乳白色の巨大な球形を保ったまま濃み、博麗神社を中心として広がっているようだった

「妙なものですな。陽炎のようにも見えますが」

霧は辺りに広がるでもなく、丸く形を作るように一か所に留まり、まるで水面のように波紋を広げ揺れている。

「……おや、随分とお早いお付きで」

「お前こそ、まだこんなところでぐずぐずしてたのか？」
ぱしやりとシャッターを切りつつ、カメラ片手にしれっとし

た態度で出迎える文に、魔理沙は胡乱げな視線を向ける。

「いえいえ。これでも魔理沙さんに一番槍をお譲りしたいという心からですよ。現場の確認は報道としての心構えですからね。どうぞどうぞお先に」

「……良く言うぜ」

茶化した雰囲気ではあるが、先行したはずの文がここで待っていたということは、彼女ほどの妖怪がこの異変を警戒していることも示していた。わざわざ人間の魔法使いを先に通らせようとしているのがその証拠だ。

そもそも、結界の要でもある博麗神社を襲う異変というのは、少なからず危険性を孕むと考えるべきだった。

「……………」

魔理沙は阿求を載せたまま、ぐるりと霧の周囲を半周ほど巡ってみるが、特に目立ったものも見当たらず、分かりやすい入り口のようなものも見つからない。

乳白色の空間は直径にして数里ほどにも及び、神社や周辺の森ごと山を飲み込んでいる。

霧の境界から一定の距離を保ちつつ、魔理沙は背中越しに阿求に振り向いた。

「さて、早速アドバイスを貰いたいんだが？」

「そうですね」

阿求は静かに目を閉じ、わずかに黙考。

「前置きを抜きで言いますと、私には死んだ亀でしょうか」

「……その心は？」

「手も足も出ません」

「漫談やつてる場合じゃないんだがな」

きっぱりと言いつける阿求に、魔理沙はがくんと肩を落とした。

ずれた帽子を直し、前を向く。

「どうもこりや、外からじゃや埒があかなそうだな」

「どうするんです？」

「一か八か突っ込むぜ」

自信たつぷりに言つてのける魔理沙に、阿求はそうでしょうねと苦笑。

「どうする？ なんならその辺に降ろしてもいいぜ」

「折角お出かけの準備もしたのに、こんな山の中に残り残されて、なんの収穫もなしに一人さびしく人里まで歩いて帰れとおっしゃいますか？」

「まあ、そうだろうなあ」

大体の予想通りの応答に、よし、と魔理沙は軽く頬を叩いて、ぐつと箒の柄を握った。

箒は一気に加速し、二人乗りの重さを感じさせぬ速度で山肌を這うように風を切つて、まっすぐに霧の中へと突入してゆく。

阿求は魔理沙の腰にまわした腕に力を込める。

文がフィルムを巻き、ファインダーを覗く中。

霧を白い飛沫と散らせながら、二人の姿は霧の奥へと消えていった。

[4]

突入の衝撃の直後、魔理沙は押し寄せてくる圧倒的な冷たさを感じた。全身を冷たい重量が包み込み、手足には突然錘が括り付けられたような重圧が押しかかる。

混乱の中、胸を締め上げられるように強く押され、げほっと息を吐き出して。魔理沙は自分が水の中にいることに気付いた。

「つ———!？」

予想外の事態に動揺し、もがいた魔理沙の喉から、さらに大きな空気の泡が漏れてゆく。視界は黒々とわだかまる水の中に遮られ、上下の区別すらままならない。

「うぐ……」

今にも途切れそうになる意識を奮い立たせ、魔理沙は視界の通らない周囲に視線を巡らせて、浮かぶ阿求の身体を見つけた。

「———ッ！」

水圧に押し潰されそうになる肺が軋み、息が遠くなる。冷たい水を掻き分け、阿求の手と箒を掴んだ魔理沙は、その

まま頭上——光の差すほうへと水を蹴った。

「ぶあつ!？」

息の途切れる寸前に、なんとか揺れる波間に辿り着き、魔理沙はと水面に顔を突き出した。

箒にしがみつくように浮かびながら大きく息を吐いて水を吹き出し、何度もえづいてぶるぶると頭を振る。

「し、死ぬかと思っただぜ……」

水を吸って顔に張り付く金髪を掻き上げ、水面に浮かんだ箒の上へと、阿求の身体を引っ張り上げてやる。

「大丈夫か？」

「けほ……ええ」

こちらにも濡れ鼠の姿で、阿求が咳き込む。すっかり顔を蒼くしていたが、幸いなことに意識もあり、溺れた様子もなかった。

突入の瞬間、無意識のうちに目をつぶり、息を止めていたのが偶然にも功を奏したのだ。

「掴まっとけ」

「はい……」

魔理沙は残る力を振り絞り、びしょ濡れの箒を海上に浮かべると、近くに見えた陸へよたよたと飛んでゆく。どうにか辿り着いたところで水に濡れた箒は浮力を失い、力尽きたように落下する。

「っはぁ……ッ」

白い砂浜に投げ出され、倒れ込みながらも、魔理沙の喉はぜいぜいと息を荒げ、酸素をむさぼった。ぐったりとした様子の阿求も、口元を押さえて俯き、水を吐いては額に張り付いた前髪を払いのける。

繰り返し咳き込みながら息を整えること十数分。ようやく余裕を取り戻し、魔理沙は砂の上に上体を持ち上げる。

「……なんなんだ、こりや……」

「……どう見ても海ですね」

どこまでも続く水平線。白い砂浜の向こうには、穏やかに揺れる波間。寄せては返す綾目模様の波の隙間には、白い貝殻や打ち上げられた流木が転がり、その間を赤い甲羅の蟹が横走り走り抜けてゆく。

「あややや。これは見事なもので」

ばさり、黒羽を散らしながら文が上空から降りてくる。

「どうやらここは大きな金魚峰のような構造のようですね。上からはすんなり入れましたよ」

「……真下から馬鹿正直に登っていかなくて正解だったってことだな」

安全確認に使われたことに慥然とする魔理沙だが、確かに不注意だったことは否めない。下手をしたら水圧で押し潰されていたかもしれないので、幸運と言えそうだったのだろう。

「折角ですから底まで沈んで、石臼を探して来ても良かったの

ではありませんか？」

などと、人の悪い笑みを見せる文。

「海のいちばん深い場所までは一万二千メートル以上もあるらしいですから、どうでしょうかね」

「べしやんこにならなかつただけでも良しとしておくか」

ぶるぶると首を振って耳の水を抜いてから、魔理沙はドロワーズの裾、スカートの順で服を絞り、しわしわの帽子を再度頭に乘せた。

「しかしまあ、海ねえ」

普通の魔法使いはぼやきつつ、干上がった浜辺に転がる、赤い星形を拾い上げて首をひねる。

「これまで、空から落っこちてきた流れ星がどうなるのかついで分からなかったが、こうなるのか？」

幻想郷は山の中にある。正確に言えば境界で隔離された地域なのだが、無辺広大な海に面していない事は確かだ。しかし干物や昆布など、海のものが手に入らないというわけでもない。

宴会に刺身が並ぶ事だつてあるし、一般人でも知識としては知っていることだ。

「なんとなく予想はしていましたが、どうも間違いなさそうですな」

「ん？」

一人で頷いている阿求に、魔理沙が疑問の視線を向ける。

「この海こそ、件の蟹の仕業ではないかと思ひまして」

「……おいしい。山からここまでじゃ随分あるぜ？ 貝が一人で歩いて来たつてのか？」

「聞いた話ですが、蛤は一晚で三里を走るなどと言われ、海の中では比較的活発に動くそうですよ。幻想郷の境界がどのように組み立てられているのかまでは、流石に私の記憶にもありませんが——」

小さく間を挟んで、阿求は言う。

「博麗神社は外界と幻想郷を繋ぐ、境界碑のようなものでもあります。外界にあるものを呼び込むにはここが一番都合が良いのでしょうか。これは推測ですが、外の世界で幻想になりかけている海を、こうして呼び込んだのではないのでしょうか」

妖怪の山がそうであつたように、外の世界では海が埋め立てられるか干上がるかしているのかもしれない。そんな『幻』を蟹が招いたのではないかと阿求は説明する。

「ふむ。すると、こいつはつい最近まで外の世界の海だったつてことか」

言つて魔理沙は、ぺろりとわずかに砂の混じる指先を舐め、「確かに、月の海とは味が違うな」

魔理沙も月の海は身をもつて経験している。

住吉三神のロケットで訪れた（ついでに溺れた）穢れなき月の海はどこまでも澄み渡り、生命の棲むことの許されない場所

だった。

しかしこの海には、生き物の住む生命の味があった。潮の香り、揺れる波間、跳ねる魚や岩肌に生えた海藻。それらが多くの生命の息づく海なのだという事を教えている。

「——しかし、この有様じゃ、神社もどうなってるか分かったもんじゃないな」

「まさか水没してるなんてことはないと思いますが」

そう言いつつも、文の口調がそれを期待している風なのは、わりといつもの事だ。

「……探すか」

足元の砂を掬い、ひとりごちる魔理沙に二人も頷く。
打ち寄せる波はわずかずつ水位を増しているようだった。

[5]

障子の隙間から差す穏やかな陽射しを感じ、眠気を誘う波の音にまどろみながら、薄掛けを肩まで引き寄せて寝返りを打つ。
楽園の素敵な巫女、博麗霊夢の朝は遅い。

もともと夜が早いほうでもなく、晩酌などで夜更かしも多いためだ。熱心に境内を掃除することもないため、陽が出るまで

横になっていることも良くあった。

（……何？）

しかし今日はやや事情が違う。

眠気を招く規則的な波音は、神社で——いや、幻想郷で聴こえるはずのないものだ。

霊夢は不機嫌に眉を歪め、薄い布団の上に身を起こす。

「ふあ……」

大きく背を伸ばして欠伸をひとつ。はだけた胸元を整え、霊夢は鼻先をかすめる潮の香りに、訝りながら雨戸を開ける。

神社の裏手に当たるそこには、揺れる蒼海の水平線があった。鎮守の森というほど大層なものでもないが、昨日までそこは確かにただの林だったはずだ。ちょうど結界の境目にあたる場所であり、水場と言えば蓮葉が浮かぶ小さな池がある程度の些細なものだ。

数度目を擦って、眼の前の水平線が夢ではないことを確認すると、霊夢は寝間着のまま頭を搔きながら外へ踏み出す。

縁側の下には白い砂が積もり、穏やかな波が縁の下を浚うように揺れている。

霊夢は伸ばした指先で砂浜に揺れる波に触れ、指先を舌先にちよんと載せてみた。

「……ふむ」

口中に感じる、わずかに苦みの混じる塩辛さに一人頷いて、

霊夢は結論付けた。

「海ね」

空には雲がいくつも重なり、遠く吹き抜ける風は、青空と触れ合う水面の境界線へと続いている。

幻想郷の境界、結界の要たる博麗神社は、一夜にして出現した大海の波打ち際に揺れていた。

沖では揺れる青い波、砂浜に輝く強い日差し。雲の間には大きな鳥が翼を広げ、猫のような鳴き声を上げている。

等間隔で波音を響かせる海を前に、霊夢はしばし腕組みし、台所へと向かった。

組み置きの水で湯を沸かすと、お茶を入れて縁側に戻る。

寄せては返す波間の音。縁側に腰をおろして足を伸ばし、行き来する波に爪先をさらして、霊夢は湯呑みを傾ける。

「ふう……」

遙かに続く水平線の先へ視線を向け、しばし一息。

砂浜を小さな蟹が横切り、流れ着いた流木を乗り越えてゆく。

沖合では銀色の魚が跳びはね、ずっと舞い降りてきた白い鳥が器用にそれを啜えて飛び去っていった。

「寝なおそうかな」

ことんと飲みかけのお茶をちゃぶ台に載せ、霊夢は布団に戻った。薄掛けを首まで引き上げ、横になったところで、

「いや待て待て」

頭上からの聞き慣れた声に、霊夢は視線だけで空を見上げる。開け放った縁側へ、箒に跨った魔理沙がすうつと下降してくる。

潮風を揺らして、魔理沙は神社の縁側へと箒を着陸させた。

「どうも、霊夢さん」

「お邪魔します」

同じく背中に羽根を広げた文、魔理沙の箒の後ろに座る阿求と順番に顔を見回し、霊夢は気だるげに布団を這い出し、首筋を搔いた。

「なんなのあんた達は」

「そりやこつちが聞きたいんだが……この有様で良く寝てられるな」

大物なんだか暢気なんだかわからんぜ、とぼやく魔理沙。

「……ちよつと、びしょ濡れじゃないのあんた」

「不幸なことにな。風呂とか使えるか？」

「海の真ん中で井戸が使えるならね」

「とりあえず着替えだな。阿求の分は借りるぜ」

上がり込んだ魔理沙は、勝手知ったる他人の家とばかりに箒を漁り始める。

「……私としてはどうして神社に魔理沙さんの着替えが一式揃っているかの方が気になりますかねえ」

至極まっとうな疑問ではあったが、ファインダー越しに霊夢にじろりと睨まれて、渋々両手をあげる文だった。

[6]

「蜃、ねえ……」

寝直すのを諦め、枕元の普段^{巫女装束}着に袖を通した霊夢は、淹れ直したお茶に口をつけた。

早々とくつろいでいる文の隣へ、着替えを終えた魔理沙と阿求も髪を拭きながら腰を下ろす。

「思ったより動いてないんだな」

「境内の掃除が面倒だっと思ってたから、神様をお願い事をかなえてくれたのかなって思ってたんだけど」

「……いや、これはこれで大問題だろ」

「まあ、神社は潰れてないわけだし、いいんじゃない？」

あっけらかんと言う霊夢。

博麗神社は、海の真ん中にぽかりと浮かんだ小さな小島の上にあつた。鳥居も石畳も燈籠も根元を海面に飲み込まれ、縁側のすぐ下まで波が寄せては返してゆく。

これで賽銭を入れていく客がいたら大したものだろうと魔理沙は思ったが、霊夢が気にした様子もないのでそ大人しく口を噤んでおく。

「でも私の知ってることなんて殆どないわよ。目が覚めたらこうだったから」

「もうちょつと危機感あつてもいいと思うぜ」

「そんなこと言われたってねえ」

気付かなかつたものは気付かなかつたのよ、と霊夢。

「……そう言えば、昨夜紫が潮干狩りがなんとかつて——」

「——いきなりだよ」

どこからともなく声が響いたかと思うと、室内にぽんと小さく霧が弾け、小さな鬼の姿に収束する。

いつも通りに赤ら顔の萃香は大きな瓢箪をくいつと煽り、酒気を帯びた口調でひよいと畳の上に飛び降りた。

「神社の裏手から海が溢れて来てね、気付いたらこの有様さ」

「あんたそれ黙ってみてたわけ？」

「何かしなきゃならない理由もないしねえ」

言って再び瓢箪を傾け、けるりと言う萃香。

「あ、魚何匹か捕まえといたから、あとで肴にできるよ」

「……そう」

どうしてこうもどいつもこいつも自分勝手なのかしら、と霊夢は自分のことは棚に上げて愚痴を漏らした。

「で、そのお化け蛤つてのはどこにいるの？」

「それが分かったら苦労は——」

「ああいえ、場所なら心当たりがあります」

ひょいと手を上げた阿求に、一同の視線が集まる。注目を集めたことに気を良くしたか、阿礼乙女は胸を張りつつ指を立て、「蜃という妖怪は二種類いるのですよ」

「あん？」

「もともと、虫というのは大陸ではより広い生き物の呼び名でして。魚介や蟹、蛇、蛙なども、文字通り「虫」の中に含まれるものです。幻を吐く蜃というものはいくつかわ知られていまして、なかでも有名なもののひとつが文さんの記事にした、大蛤。そしてもうひとつが龍の幼生です。」

『和漢三才図会』巻之四十七、介貝部では「車螯わたりがい」の項で『蛤を総て蜃と曰ふ。専ら車螯を指すにあらざるなり。また蛟蜃の蜃とは同名異物なり』とされています。

同じく巻之四十五、龍蛇部には『蜃は乃ち蛟の属にして、状はまた蛇に似て大なり。角有りて龍の状の如し』とありまして。

この、蛟蜃のほうも同じく、燕を食べる蜃気楼を吐きだすとされている生き物なのです。そしてこの蛟というのは、龍のうちでもまだ数百年しか生きていない幼いもので、池のような淡水に棲み主鯉などを食べ、鯉の多い池には自然と棲みついてしまうのです。天敵は鼈すばんだそうで、蛟を避けるには鼈を池に放しておくといいのだとか」

「——ちよっと待て」

阿求が何を言わんとしてしているかを悟り、魔理沙は解説に割っ

て入った。

「……大体、オチが読めてきた気がするんだが」

博麗神社の裏手には池があったはずだ。いまは蓮の花などが植えられているが、確か昔あそこには、年経た老亀が棲んでいたはず。いつからだだったか、霊夢が自分で空を飛ぶようになってからはあまり見かけなくなっていたが——

「つまりあれか。崖から出てきた蜃つてのが、蛟でもあるとしたら——」

「ええ。間違いなくそこに住みついたのでしょね。」

……歴史は、妖怪にとつて大きな力。長く生きた妖怪ほど複数の側面を持ち、力を蓄えることができます。何百年と地面の中で生きてきた大蛤であれば、同じ名前を持つ別の妖怪の性質も兼ね備えるでしょう。……八雲の式神などがいい例ですね」

「そういうことね」

霊夢はひとつ頷くと、懷から無造作に符を引っ張り出した。

「……つておい、霊夢？」

「いるのが分かつてるなら簡単よ」

一見やる気のない手つきで放たれた追尾呪符は、鋭い軌跡を描き、空を割いて波間へと直撃する。

破裂する符が水柱を轟かせて、砂混じりの飛沫を飛ばす。

その波間から顔を見せたのは、貝幅数十メートルには及ぶかという巨大な二枚貝だった。

7

砂を蹴立て、地響きと共に姿を見せた大蛤を、魔理沙は恐々と見上げる。下手をすると神社よりも大きいのではないだろうか。幻を吐くという大蛤の殻には複雑な模様が浮かび、ゆらゆらと輝きを放ちながら揺れていた。

「……良く見つけるもんだぜ」

「なんとなくよ」

「……なんでもそれで済まされちゃたらんぜ」

ぼやく魔理沙の隣で、霊夢がたて続けに封魔針を撃ち放つ。並みの妖怪なら二、三匹まとめて刺し貫く貫通力を備えた針弾は、しかし大蛤の硬い殻を浅く削って火花を立てるだけだ。

「——意外に頑丈ね」

妖貝もただ撃たれるままではなかった。蜃は突如身震いしたかと思うと、砂を蹴立てるようにして動き出す。

「おっと」

文が葉団扇を振るって巻き起こした風の渦が、大蛤へと直撃する。だが、分厚い殻を閉じて身を伏せた巨大貝は、風の渦をやり過ごし、後方に水を噴き出して突進してくる。

「ひゃあああ!？」

「萃香っ!」

「あいよー」

阿求を連れて宙に逃れた魔理沙と入れ違いに、疎密を操り巨大化した萃香がその体当たりを押しとどめる。衝突の轟音が響き、大きく波立った海面に神社が小さく揺れた。

「……結構重いな、こいつ……っ」

鬼の臂力にしても、大蛤の巨体を突き飛ばす事は難しいようで、二つの力は海上で拮抗する。足元が砂地な分だけ、萃香も踏ん張りが利かないらしい。

「クリームスーブの材料の分際で、やるもんだな!」

阿求を後ろに乗せた簪の上、魔理沙は八卦炉に調薬を放り込んで躍り出る。防水加工された炉の中に、膨大な魔力が練り込まれ、さらに力を増してゆく。

「喰らえ!!」

萃香の脇をすり抜け、突き出した八卦炉の先に、強大な魔力の燐光が灯る。

巨貝を浸かる海水ごと、塵まで焼き払わんとする魔理沙のスベルが完成する直前。蜃は突如、ぱかりと殻を開いた。

【ミラーボックス鏡模倣式・複写】——強制力十三——修正、十五

「——げ!?!」

「スペルカード!?!」

声鳴き宣言を、その場にいた皆が聞いていた。

開いた大蛤の殻の内側がまるで鏡のように光り輝く。繊細な曲線を描いた鏡面は閃光の射手が放たんとする光芒を映し出し、その中心へと収束させる。

そして。

【幻鏡模倣式、木霊】——強制力十

開いていた貝殻を閉じ合わせ、蜃は身を震わせる。そこから膨らむのは、間違いなく普通の魔法使いのとおっておきのスペルの輝き。

「っ!?!」

霊夢は咄嗟に攻撃を切り替え、両手に掴めるだけの符を掴んで投げ放ち、二重の結界を張る。

同時に貝殻の内側で反射・増幅・拡散された恋符の閃光が、轟音と共に視界を埋めた。

斜めに展開した結界にぶち当たり、射角をずらされた魔力の閃光は、神社の屋根を削り取って空へと吸い込まれてゆく。

「——おお、怖い怖い」

威力の余波が海水を巻き上げ、ざあ、と雨のように飛沫を散

らす中、文は上空へと退避。霧になって身を躲していた萃香も離れた場所です体化する。

「ちよつと! 神社までぶつ壊す気!?!」

「今のは不可抗力だろ!?!」

言い合いながら効果時間を過ぎて割れる結界から飛び出し、魔理沙と霊夢は海の中に蠢く蜃に向き直る。

二枚の貝殻の表面に揺れる、陽炎のような紋様は先程とは形を変えていた。より禍々しく、紅い色を浮かび上がらせるその気配は、明らかに感情と呼ぶものに近く、見るものの背中に少なからぬ怖気を感じさせる。

「……攻撃色?」

阿求のその表現は間違っていないかった。

蜃はさらに身を振ると、凝ったような虹色の気を吐きだす。炎のように揺らめく幻の塊が、ざわりと波打ち——宙空にいくつもの幻像を映し出す。

【攻撃構成式、斬撃】——強制力八——修正、十

攻撃対応・【攻撃支援式、増強】——強制力七——修正、六

与打撃決定対応・【付加攻撃式、拡大】——強制力九

現れたのは刀に剣に槍に斧。物騒なだんびらの群だった。七色の輝きと主に実体化し、際限なく分裂する刃の群れが、次々

に浜辺を打ち貫いてゆく。

「回避!!」

誰かが叫んだ。まるで戦場のように飛び来る武器の雨霰を避けながら、魔理沙は蜃から距離をとる。

「ちよつと待て、話が違うぜ!!」

「魔理沙さん、上ですつ!!」

「上?」

【攻撃構成式、崩落】——強制力十一

帽子を押さえて顔を上げた魔理沙の視界を一杯に埋めたのは、空から落下してくる巨大な岩塊——いや、山の切れ端だった。

「おおおおおお!!」

全速力で方向転換する魔法使いの箒の先をかすめるように、莫大な質量の岩盤が海に叩きこまれ、水面を二つに裂いて揺らす。

津波のように弾けた海面を、文が轟風で押しとどめた。

その間にも巨大蛤は、砂を掻き分けて動きながら、何もない中空に幻の映像を吐き出してゆく。

【攻撃構成式、聖砲】——強制力九
攻撃対応・【付加攻撃式、獣牙】——強制力十

続いて出現した幻は、黒く凝った砂の嵐。禍々しい瘴気を漂わせた獄砂の塊が、意志を持つかのように雪崩を打って押し寄せた。

「うわ!？」

漆黒の砂はまるで意思があるかのごとく渦を巻き嵐のように吹き荒れ、あたりの景色を切り裂いてゆく。

黒い砂に埋もれた海岸は、たちまち瘴気に当てられてぶすぶすと焦げ始めた。

「よっ……と!!」

それを塞ぎ止めたのは萃香だ。疎密を大きく傾けた空間の一点に、吹き荒れる呪瘟の黒砂を吸い寄せ、触れぬように収束させる。

ばさりと翼を揺らし、文が感心したように言う。

「……吐き出すのは楼台だけではないということですね」

「こんなに物騒な代物なのか、こいつは!？」

箒をジグザグに揺らし、回避行動をとる魔理沙の背中で、阿求も緊張に喉を鳴らす。

「……もともとこの海そのものが、蜃の吐き出した領域なわけですから、私達はその腹の中で暴れているようなものかもしれません。もつともあまりにも文献と違いますから、私の知っている以外にも別の幻が混ざっているのかもしれませんが」

「厄介ね……」

眩きながらも霊夢の判断は迅速だった。恐ろしい素早さで導引を結び、懐の符を抜いて大蛤の周囲に投じる。不安定な水と砂の上という立地を感じさせない鋭さで瞬く間に陣が引かれ、脈々と霊力を漲らせた。

神技「八方龍殺陣」

天を衝くほどの巨大な結界が、蛤の巨体を内側に閉じ込める。霊夢の切り札スペルのひとつである陣符は、相手を脱出不能の陣の中に閉じ込め、動きを封じて防御の上からでも無関係に体力を削りきる凶悪なものだ。

が、それでも大蛤は動きを止めなかった。着弾に弾ける結果の中、しっかりと殻を閉じ合わせ、砂のなかにじりじりと身をうずめるようにして、攻撃に耐えている。

「おいおい、あれでも駄目なのか!？」

「龍だって言うから少しは効くかと思ったけど……」

陣はなおも猛りを上げていたが、蜃は潰れることもなく、じつとその場に留まり続けていた。

「直接攻撃は効かない、レーザーは反射される、殴ろうにも硬すぎる。……面倒ね」

「あの殻をこじ開けないとどうしようもないですね、これは」

「しかし、どうします？ 力づくでは少々厳しいのでは？」

舞い降りた文も、心なしか硬い表情だ。そんな中、阿求はちよいちと魔理沙の袖を引いて、

「魔理沙さん、少々お耳を」

「どうした？」

「ひとつ思い付きました。あれが蛤でもあるならば、手があるかもしれない」

簪の後ろから、阿求は魔理沙に告げる。

「……………」と、いう具合なんです、どうでしょう？」

「……まあ、できないことはないと思うが」

半信半疑の様子の子の白黒魔法使いに、阿求はでしたら是非、と真剣な表情で領いた。

「折角買って出た助言役がただの足手まといでは、御阿礼の子として格好が付きませんか」

「……何か手があるの？」

「あー、正直あんまりやりたくないんだが……この際贅沢は言つてられんな。いくぜ！」

魔理沙は簪を操り、矢のように飛び出した。

ほぼ同時に陣の効果が切れ、大蛤の巨体を支えきれずに崩壊する。ずずんと地響きを轟かせ、動き出した蜃はさらに幾つもの攻撃的な幻を吐き出し、殻に浮かぶ紋様を激化させた。

降り注ぐ氷柱、波打ち暴れる肉食魚の群れを避けながら、そ

の分厚い貝殻めがけ、魔理沙はポケットから小瓶を取り出し、中身を空にばらまいた。

「――折角のコレクション、ふいにしたお代はたっぷり取らせてもらうぜ！」

はあ、と空に光が満ちる。カラフルな色合いの星々が飛び回り、蜃の殻へと降り注ぐ。

――魔符「スターダストレヴァリエ・改」

それは、星に見立てた弾幕を撒き、相手の移動を封じて押し込む魔理沙の得意スペルのひとつだ。広範囲に拡散するスペルの回避は困難だが、反面火力にはやや欠ける。一見、蜃の巨軀には向かないかと思われた。

ただし、今回触媒にしたのは普段から彼女が常備している、苔や香草を煮詰めて作った砂糖菓子（スエーデン）の星屑ではなく、さつき浜辺で拾ったばかりのヒトデだ。

二枚貝の天敵である星魚達は、その可愛らしい外見とは裏腹の猛猛さで、吐きだされる蜃気楼をもとせずに巨貝に喰らいついてゆく。

輝き飛ぶ海星が分厚い貝殻を打ち抜くたび、蜃は悶えるように身を震わせる。

「効いてる!?!」

「今だ!」

――鬼符「大江山悉皆殺し」

ひるんだ大蛤の隙を見逃す事もなく、萃香は両の腕でその巨大を抱え上げた。力任せに緩んだ貝の蝶番を掴み、二度三度と地面へ叩き付ける。砂浜が揺れ軋み、水平線の向こうまで衝撃と轟音を轟かせる。

疎密を操る鬼の力が爆音と共に燐火を撒き上げ、緩んだ貝殻が大きくこじ開けられる。

露になった大蛤の貝殻の内側、生々しい内臓の間に、虹色に輝き、陽炎のように揺らめく一点が覗く。

「あれです!」

阿求が指差した先――大蛤の腹の中に輝く中心核へ。魔理沙の閃光、文の竜巻、萃香の鎖が立て続けに飛び、着弾の爆音を撒き散らす。そして――

――宝具「陰陽鬼神玉」

霊夢の手のひらから放たれた陰陽玉が最後の一押しとなった。青白い輝きと共に巨大化した宝具は、圧倒的な質量と破壊を撒き散らしながら突き進み、巨貝を分厚い殻ごと押し潰す。

海を叩き割る爆音と共に、大蛤はゆつくりとその姿を乱し、ずずんと水柱を上げて倒れ込む。

そして――

ざわざわと引き始めた海の真ん中に、一抱えほどもある二枚貝がふかりと浮かび上がる。

海を呼び寄せた妖貝、蜃は退治され、ようやく長太の大蛤が本性を現したのだ。

「……なあ霊夢、これどうするんだ？」

「そうね……」

魔理沙の問いに、霊夢は腕組みをし――やがて結論を述べた。

[8]

神社を取り囲んでいた幻が晴れ、海がすっかり消える頃には既に昼を回っていた。

いつもの光景を取り戻したちゃぶ台の上には湯気を立てる暖かな椀が並び、隣には採りたての海老や魚で作った散らし寿司も並んでいる。

腰を下ろした霊夢は、目を閉じて手を合わせた。

「……いただきます」

「「いただきます」」

「いや待て」

文、萃香、阿求と人妖の声が唱和する中、魔理沙は力の限り突っ込んでいた。しかし当の霊夢は怪訝な顔を見せる。

「？」

「だからなんでそこで不思議そうな顔してんだお前は!? 私、なんかおかしいこと言ってるか？」

お椀の中身を指さして叫ぶ魔理沙。砂出した蛤を昆布、酒と一緒に水から火にかけ、醤油で味を調えた吸いものだ。

良い香りを漂わせる椀の出汁の中には、小さく切り分けた大蛤の身が浮かんでいる。

「妖怪喰うなよ!」

「食べるわよ蛤なんだから」

さっきまで境内で暴れていた妖怪だというのに、霊夢はまるで躊躇がない。

「ちょうど上巳の節句でしょ。蛤はつきものじゃない」

「いや、だから……?」

困ったように他の面々の顔を見回す魔理沙だったが、文や萃香は言うに及ばず、阿求までもきよとした顔で魔理沙を見、食べないんですか? と聞いてくる始末。

雛祭りのご馳走に舌鼓を打つ一同の中、魔理沙は自分の常識に困惑を覚えつつも痛む頭を押さえる。

「いくら雛祭りだからって、ほかにあるだろ、せめて」

「食べないと無くなるわよ？」

ぱくぱくと蛤の身を口に運ぶ霊夢を横目で見、魔理沙は諦めと共にお碗を傾ける。

「……やっぱお前は本当に巫女なのか疑問だぜ」

……腹立たしいことに、幻を吐く蛤は、大層美味しかった。

[fantasy]

所狭しと雑多な品の並ぶ店内にも、わずかに陽気が差し込むこの季節。店の裏手には蕾を膨らませた桜が日、一日と春を刻んでいる。

魔法の森の外れにある古道具屋、香霖堂はいつものように閑散としていた。

そんな店の惨状を気にするでもなく、店主の森近霖之助は店の奥に陣取り、いつもの手に入れた品の検分をしていた。

「……………」

眼鏡の奥で真剣に品を見定めていた霖之助が、ふと鼻を鳴らす。いつのまにか、店内を満たすマルベリーの香り。

妖艶な姿の少女が、畳んだ日傘を手に見現れていた。

「今日和」
こんにちわ

「いらつしやい」

来客にも構わず、素っ気ない挨拶だけで顔も上げようともしない店主の側へ、境界の大妖、八雲紫は音もなく歩み寄る。

「あら。螺鈿の幻燈？ 珍しい物をお持ちですわね」

カウンターのの上にあるのは小型の洋灯ランタンだった。簡素ながら工夫を凝らした細工で、薄緑の蠟を立てた燭台の周りを、虹色の

反射板が何枚も覆っている。

「蠟脂しんじろうの幻燈なんて、扱う細工師も途絶えて久しいのですけれどね」

「知っているのかい？」

くすくすと微笑み、紫は幻燈を覗きこんだ。

『其の脂、蠟ろうに和して燭しやくに作る。凡そ百歩に香におふ。烟けりの中にも亦、樓閣ろうかくの形有り』。蜃の脂を練り込んだ蠟燭は、また同じように蜃気楼を映すのですわ」

「……文字通りの幻燈という訳か」

霖之助は抽斗ひきだを開け、燐寸りんすんを取り出すと蜃脂の蠟燭に火を灯した。

たちまち周囲には馥郁ふいくとした香りが漂い、ぼんやりと虹色の楼閣が浮かび上がる。紫が手袋の指先で反射板を弄ると、その光景はたちまち波の揺れ動く海岸へと変化した。

「蜃の貝殻を使って光を曲げ、幻の姿を変える——人間という

のは本当に面白いことを考えるのですね」

さながら幻鏡。そう呟いて、紫は楽しそうに次々と幻を操作してゆく。そのたびに浮かび上がる幻像が形を歪め、降りしきる雨や極彩色の大森林、異邦の宮殿へと姿を変えてゆく。

懸案の使い方が判ったところで、霖之助はようやく顔を上げた。椅子に背中を預け、紫に向き直る。

「……さて、折角の来店と解説に感謝をしたいところだけれど、冷やかしてないのならばね」

「あら。貴方に逢いに来たとはい思ってくださいね」

「八雲の大妖と商売抜きで付き合う気にはなれないね」

「つれないお方ですね」

……では、本題と参りましょうかしら」

広げた扇で口元を隠し、紫はついと霖之介から離れる。

その手にはいつの間にか紙束が握られていた。紫の手にあるものが何なのかに気付き、霖之助は視線を険しくする。

「興味深く拝見させていただきましたけれど、随分と個性的な見解ですね？」

「……何時の間に読んだんだ」

霖之助はいつか自分の本を出そうと、暇を見てはあれこれと文をしたためている。しかし、まだ彼は誰にもその事を話したことはなかった。紫はその原稿を握っているのである。

『正月、蛇と雉と交みて卵を生じ、雷に遇ひて、即ち土に入

ること数文、蛇の形と爲り、二三百年を経れば、乃ち能く昇騰す。卵、土に入らざれば、但だ雉と爲るのみ』

土の下で蛟は龍へと育ち、いずれ天へと昇るのです。化石とは名の無き神代の石である——というのは強ち的外れな推論でもありませんのよ。蛤も龍と同じように成長と共に名前を変えるのですし、貝のある場所は海である、という見立てまで

含めてね」

「……君は、あの大蛤が幻想郷に現れる龍だったのだと言いたいのかい」

声音を硬くする霖之助に、紫はばちんと扇を閉じた。

「明察。夢や想念は幻想の糧ですもの。貴方はそれを語り、文字にして形と残した。それが土の下の龍を生んだのです。もつとも、崖崩れは予想外でしたけれど」

ゆらりと幻燈が輝きを変え、果ての無い荒野を映し出した。

八雲紫の笑みに、霖之助は幾分表情を硬くする。紫の言っていることが正しいなら、彼女は龍になりそびれた失敗作を、少女達に始末させたということに他ならない。

「……妖怪の賢者たる大妖と言えば、そんなことが許されるものなのか？ ……いや、それよりもっと大事なことがある。あの蜃を作ったのは僕だとしても？」

立ち上がる霖之介に、紫はさらに笑みを重ねる。逢瀬を愉しむ恋人のように。

「うふふ。そんなに怖い顔をなさらないでくださいな。ですから、私も見立てをし返したまですわ。貴方のこの本と同じようにね」

形を持たぬ蜃気楼は、幻であるがゆえに定まった名を持たず、様々な呼ばれ方をする。長太の他にも蓬莱島や竜宮、狐楯。そして、ある地方ではこれを浜遊びとも呼ぶ。

また、古く三月三日は、乙女が浜辺に下りて潮干狩りを楽しむ日とされていた。上巳の節句——雛祭りとは蛤の関連性は、それに遡るのである。

「ね？ 蛤の化け物を退治するには丁度いいでしょう？」

「……………」

龍を蛤と偽り、さらにそれを潮干狩りに見立てることで、元の存在と関係のないものとして穏便に処分する。

そんな芸当ができるのは、物事の境界を操る八雲紫ならではの芸当だろう。

「……龍の出現すら、君の自由裁量ということかい」

「そんな大それたことは申しませんわ。磯の鮑の片思い。逢う片貝を探して幾年——です」

蜃気楼が店内を揺れる中、立ち尽くす霖之介に紫はもう一度くすくすと微笑んで、卓上の幻燈を手を取った。

蠟燭の灯が消え、古道具屋は元のかたちを取り戻す。

「こちらは頂いて行きますわ。お代は今回の種明かし」

すう、と背後に開いた空隙の中に、するりと身を滑り込ませ。「それでは御機嫌よう」

現れた時と同じ唐突さで、隙間妖怪は姿を消してしまう。一人取り残された霖之介は、しばし佇んでから、ゆつくりと椅子に腰を下ろした。

「全ては蜃の見る夢、とでも？ 恐ろしい話だな」

はらりと——どこからか紛れ込んだ、桜の花片の一枚が、店主の手元に対価とばかりに舞い降りた。

(了)

【参考】

苫小牧駒澤大学紀要 2009 年 3 月 31 日発行第 20 号
<http://www.t-komazawa.ac.jp/university/bulletin/pdf/kyou20.pdf>

小説・戯曲・評論・随筆・短歌篇 心朽窩旧館 やぶちゃんの電子テキスト集
水族の部 (和漢三才図會)

<http://homepage2.nifty.com/onibi/textsyousetu.htm>

アラビアン・ダーク・ファンタジー R P G
ゲヘナ・アナスタシス

[Mirage]

注意一秒、怪我一生。……何事も不注意はとんでもない事故を引き起こすものだ。

その日の私もそうだった。期末も押し迫った3月、時間ぎりぎりまで推敲した課題をようやく提出し終えてすっかり燃え尽きた私は、身体が必要とする砂糖たっぷりのエスプレッソを口にしつつ、カフェで拳を握り力説する蓮子の言葉を聞くとともに聞き流していた。

「だからね!? 女の子のお祭りをただ漫然と過ごすなんて、乙女としてどうかと思うのよ!」

「……そうね」

「たとえ科学世紀を生きる少女としても、大事にしなくちゃいけないものがあると思わない?」

「……そうかもね」

「そうよね! メリーもそう思うわね! じゃあ今週末の活動は『よし乃』で天然素材の懷石フルコースで決まりね!」

「……………はい?」

後悔したところで遅い。かくして蓮子に引っ張られてやって

来たのは、都心からも随分離れた高級料亭。どう見ても大学生二人が連れ立って入るには場違いな雰囲気のお座敷に通されて、私は適当に頷いていた一週間前の自分を思い切りしかり飛ばしてやりたい気分一杯だった。

「そうよね……こうなるのよね」

「ん? どうしたのメリー。この世の終わりみたいな顔して」

蓮子は実にご機嫌な様子。今日のお料理をしたためた一覽を眺めてきやー、とテンションを上げている。

一方で私はこの1時間のためにいっただけだけの金額が泡と消えてしまふかに思いを馳せていた。

「週末には春物の服、見に行こうと思ってたのに……」

「いいじゃないの。宵越しの銭は持たないのが粹つてものよ」

そう言えば蓮子は東京の出身なのだった。……もともと、商売で上方の人間に及ばないことを悔しがった江戸の商人の負け惜しみだったという話らしいけど。

試験で失敗したからと言って、やけ食いに私まで巻き込むのは自重してほしいとは思う。

恨みがましい視線を向ける私の向こうで、蓮子は感謝なさいよとばかりに控えめな胸を張って、

「一週間前になってから急に予約入れてもらうの大変だったのよ? いまどき天然ものごはん抜つてるお店なんて、ほとんど無いんだから」

自然食品よりも安価で高栄養、おまけに美味という合成品が溢れているなかで、あえて天然ものを口にするということにどれだけの意味があるのかは難しいところだ。

しかし世の殆どのものが合成品で占められるこの科学世紀の時代、天然ものというのはある種の希少価値、ステータスでもある。

ここ『よし乃』は京都でも珍しく、そうした要求に応えるための料亭なのである。

「蓮子はもつと合理的なほうが好きだと思ってたけど」

「合理的よ。ちゃんと栄養になるもの」

でもお高いんでしょう？ と私が訳の分からない現実逃避に浸っている間にも、お膳が運ばれてくる。

雛祭りをモチーフにしたお昼の食事——ディナーでないのは予算の都合上だ——を前に、そつと手を合わせ、まずはお椀に手を付ける。蓋を開ければ溢れだすのは季節感あふれる出汁の香り。蛤のお吸い物だった。

これ一杯でいくらするんだろうとみみっちいことを考えつづも、勿体ない気分ですつと口を付ける。

「……美味しい」

「ね？」

思わず素直にそう口にしていた。

口の中に広がる潮の香り。合成品とはわずかに違う風味は、

どこか遠くの海の味だろうか。

落ち着いてもう一口、お椀に口を付ける。悔しいけれど、確かに蓮子のお勧めだけあって（そしてお高いだけあって）味わったことのない不思議な風味があった。

気付けば私は何度も、お吸い物を口に運んでいる。

「……ふふ。メリーが気にいってくれて何よりよ。」

蛤って面白いのよね。もともと雛祭りに喜ばれたのは、二つの貝殻が、対になったもう片方以外と噛み合うことがないからって理由で、貞節、貞淑の象徴とされてたからなんだけど」

「ああ、女の子の貝合わせね」

何気なく口にした瞬間、蓮子が唐突に口の中のものごとと吐き出した。そのままテーブルに突っ伏し、げぼげぼとむせる。

「……ちよつと、汚いわよ蓮子」

「……つ、な、な、なな何言ってるのメリーっ、こんな昼間っからっ!! お酒も入ってないのにっ!!」

眉を潜める私に、何故か真っ赤になつて詰めよってくる蓮子。私は意味が分からずに瞬きをするばかり。

「何って、そういう遊びでしょう？ 絵を描いた貝殻をたくさん伏せて、順番にめくって同じ絵柄の貝を揃えていくっていう……」

その細工などから海外でも評価が高いのだとか。……これまた昨今では、そうした美術品の材料も、多く合成のものである

ことが多いしいけれど。

「……ん、え、えっと、まあね、あはは。そうよ、そ、そうだけれど……うん、貝覆いとも言わねっ」

咳き込んだせいか、赤くなつた頬を押さえつつ蓮子はなにもごもこと口ごもる。

「どうしたの？」

「何でもないわよっ」

蓮子はごほごほと咳払いをして、

「……で、そんな風に貞淑の象徴にされてる蛤だけれど、その一方で学名は遊女のゲームメトロリックス・ルソリアなんて言われてたりするの。まあ、この命名も偶然みたいなもので、元々は愛と美の女神ヴィナスにちなんだ由来なんだけど——」

来なんだけど——」

なにかを誤魔化すようにあれこれと早口で解説を始めた蓮子は半分聞き流しつつ、私はしばし、春の香りを堪能した。

貝の身を箸に掴んだところで、ふと疑問が浮かぶ。

「そう言えば蓮子、これってどこから持ってきたもののなの？ 貝なんてもうほとんど絶滅してるじゃない」

「え？ ああ。そうよね。正確にはこれは蛤じゃないらしいわ。

近縁種の代理品」

メトロリックス・ルソリアはすでに前世紀の終わりには外来種によつて駆逐され、絶滅してしまつていてという。ちょうど、琵琶湖の干拓事業の中止を巡つて環境運動と霊的守護の調和が

あれこれぶつかり合つていた時代だ。

蓮子の語るところによれば、このお吸い物に使われている貝の正体はアークティカ・アイスランディアと呼ばれる種類であるらしい。

なんでも欧州ヨーロッパの北、北極に近いあたりでしか獲れない稀少品だそう。深い海の底で泥の中に潜り、代謝を極限まで落とし、何百年も生きるといふ種類なのだから。

「これが凄いいことに平均して300年から400年くらいは生きるそうよ」

「……そんなもの食べちゃつて大丈夫なのかしら」

はたして蜃気楼の主だつて、そこまで生きるものなのかどうか。

個人的には少々どころではなく忌避感があるが、蓮子は気にした様子もなかった。

蛤は春から夏にかけての繁殖期を前に、冬に長い時間栄養を蓄えて美味しくなる。そのため春先に潮干狩りをするのはとても理にかなつていのだそう。

「何百年も冷たい海の中で冬を過すごしてるんだから、味もそれに見合つたものつてことよ」

四百年を経て食べる幻の味。そう思うと訳もなく緊張してくる。目を閉じてその年月に思いを馳せてから、お箸を口に運んだ。じわりと溢れ出す味わいを堪能する。

……と。

「……あら？」

「どうしたの？」

「……ん、っ」

口の中に感じた小さな歯ごたえに、目を閉じて口を開ければ、舌の上からきらきらと輝く小さな丸い珠が転がり出てきた。

「……これ、真珠？」

「みたいね」

掌を覗きこんだ蓮子が目を丸くする。

白く丸い珠は、きらきらと輝く、まるで七色の炎が燃え盛るような虹の色合いを浮かべていた。

「……あ」

その、揺れる幻の炎の中に。

揺れる白波、潮の香り、穏やかな砂浜。

見たこともない遠い東の果ての、青い蒼い海が、眼の前に広がったような気がした。

(了)

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『メトロリックス・ルソリア』は、幻想の海で妖貝退治をする幻想少女達の活躍を描いた、当サークル十三冊目のSS本となります。

もともと蜃気楼と蜃の話は機会を見て書きたいと思っていたのですが、三月精の本誌連載まさにそのお話があるというのをすっかり失念して慌ててチヂクをして大汗をかく羽目になりました。

結果、香霖堂の「名前の無い石」ほかいくつかのお話を絡めてのものとなりましたが———どうにか形になつてホッとしています。

作中で蓮子たちが食べているのはアイスランドガイという種で、実在する貝の種類です。アイスランドの深海で捕えられた種を解剖して貝殻を解析したところ、寿命400年を超えていたことが分かったとして一時期話題になったこともありましたが……調査が及ばず、本当に食用に適しているのかはやや怪しいのですが。

また、作中の蜃の解説や貝の蘊蓄については、一部意図的いくつかの説を混同している部分もあります。

作中の蜃の描写はだいぶ突拍子の無いものになっていますが、私の元ネタびいきゆえのものでして、どうかお遊びとご容赦頂ければと思います。分かってくださる方がいましたら、是非語り合いたいところです。

今回も自身氏、Ryūa氏には様々な形でお世話になりました。

また、本作の表紙には、フリーフォント「東方影絵体」を使用させていたいています。この場を借りて感謝いたします。

———それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

【奥付】

「メトロリックス・ルソリア」

平成23年3月13日 第8回博麗神社例大祭

発行 折葉坂三番地 (<http://orchazakablog28.fc2.com/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方noble」の二次創作です。





◆東方project Fanbook 2011.3.13 発行:折葉坂三番地◆

